

西条には行けないⅡ部

経済学部 岡本 雅典

現在広島大学においては、経済学部と法学部でそれぞれ第Ⅱ部を置いて「勤労学生のための大学教育」を行っている。経済学部および法学部では千田地区または広島旧市内で教育し得る場所と施設を確保し、なんとかⅡ部の教育を広島旧市内で続行するための働きかけを従来とも行って来ているし、今後とも継続・努力して行く予定である。

現在、Ⅱ部に入学して来る学生のうち、入学当初すでに定職に就いているか、継続的にアルバイトを行っている者の数は、入学者数の $\frac{1}{2}$ である(第1表)。各年度の当初、オリエンテーションのときに記入回答式で調査したものである。たとえば、平成元年四月当初では標本抽出率95%、回答率33%であり、入学者数に対する就職者数(定職者とアルバイト生)は33.6%であった。しかし、在学中に地方公務員あるいは国家公務員等の試験に合格して、漸次定職に就いて行くのが実情のようである。とくに広島県出身の学生(昭和62年第二部入学者中、広島県出身者数の割合は48.6%)にこの傾向が強い。他府県出身者はどちらかと言うと、アルバイト等をしてなんとか5年間をしのいで、卒業時に出身県あるいは大都会に就職する傾向がある。事実、昭和63年度では経済学部第Ⅱ部卒業生中、すでに就職している者は約40%で、新たに就職した者は60%に達している。

以上の事実から推測されることは、地域社会とくに広島市とその周辺に勤労の手段があり、定職者については終業後にできるだけ短時間に来られる所に大学があることが望ましく、またアルバイト等の手段に訴えている者にとっては、仕事の機会が十分にあることが

第1表 夜間学部勤労学生数(入学当初数)

入学年度	経済学部第二部			法学部第二部		
	在籍者	勤労学生	%	在籍者	勤労学生	%
昭和 55	78	32	41.0	89	25	28.1
56	86	34	39.5	92	31	33.6
57	83	32	38.5	90	27	30.0
58	83	30	36.1	93	27	29.0
59	73	20	27.4	93	30	37.3
60	90	33	36.7	92	40	43.5
61	108	39	36.1	101	28	27.7
62	107	42	39.3	107	37	34.6
63	96	30	31.3	91	45	49.5
平成 1	107	36	33.6	107	36	33.6

望ましい。

入学者の半数は広島県と深く結びついた大学生ではあるが、他の半数は全国にわたる他府県からの学生であり、この点は第Ⅱ部とはいえ、全国規模の学生が入学する広島大学の特徴を持っている。とくに親からの援助がなく他県にはるばる来て、なおかつ大学高等教育を受けようとする意欲のある学生が、約半数以上を占めている事実を知ってもらいたい。この傾向は、この2、3年著しく、私大等の授業料等が年々上昇していることと関連があるのかもしれない。

近年、生涯教育の一環として大学教育を見ようという気運がある。主婦とか老人にとっても、昼間よりは夜間の方が授業を受けやすいと考える人もいる。経済学部第Ⅱ部では、社会人入学のための特別枠を設けて、生涯教育の一部を提供している。しかし、特別の予

備コースがあるわけでもなく、相当の努力をしないと卒業までこぎ着けないのではないかと思う。この点どちらかと言うと教養学科的色彩の強い放送大学の方が学習の方法と相まって親しみやすいのではないだろうか。現在、第二部の教育内容は昼間部のそれとほとんど同じで、経済学士として修得すべき、かなり高度な専門的内容も含まれており、それなりに独自の専門教育である。

社会人といっても大学卒業後10年以上も

経って職業的知識・経験も増し、その上に立って、より高度の学問的知識・技能を身につけたい人達からの要求が近年高まって来ている。筑波大学の例のように、これらの要求に答えるのが夜間大学院である。広島という地域にこういった要望があるのならば、我々も夜間大学院の設置を具体的に考えねばならない。この種の夜間大学院は経済学部にとどまらず、法学部はいうまでもなく、他学部の協同参加が地域にとって望ましい型であろう。

●●●●●広島に残る霞地区の問題●●●●●

医学部 安田 峯 生

各部局が東広島市へ移転していく中で、広島市霞地区を本拠に活動を続ける医学部、歯学部、原爆放射能医学研究所のかかえる問題について、思いつくままに記す。以下に述べるのは筆者の個人的な見方、意見であることをお断りしておく。

学生の教育に関しては、何といっても総合科学部の移転にともなう一般教育と専門教育の関連の変化にどう対応するかが、最大の問題であろう。この点で移転の影響を強く受けるのは医学部総合薬学科である。総合薬学科では、現在2年次学生を月、火、金と週3日間霞地区へ来させて、専門教育を行っているが、総合科学部の東広島への移転後は、このような形態での教育は不可能となる。教官の東広島への派遣、霞地区での専門教育の集中化など、いくつかの対応策が検討されていると聞くが、教官、学生双方の負担増が最小となる妙案が望まれる。

医学・歯学教育においては、大学入学後早期に医療の現場を体験させる“early exposure”が、その後の学習の動機づけに有効で

あるとされる。残念なことに、本学ではまだこの試みはないが、一般教育期間中に医学に触れる機会として、医学部では進学課程1年生を対象に、週1回「医学の話題」と題して、霞地区で各講座を代表する教官による講義のシリーズが行われている。総合科学部移転後に、このような講義のあり方も抜本的に改変されることとなるが、移転により医・歯学進学課程学生が医・歯学に触れる機会が減ることのないように配慮したいものである。専門課程教官による講義を「医・歯学概論」として、進学課程教育の中に位置づけるのも一案である。一般教育の時間枠内で“early exposure”を行うことには種々の困難が予想されるが、休暇期間中を利用して、進学課程1年の期間中に医療現場を体験させることは可能であろう。

授業への影響と合せて、忘れてならないのは学生の課外活動への移転の影響である。霞地区には多くの文化・体育クラブがあり、心豊かで健やかな医療従事者の育成に大きな役割を果たしている。医・歯学進学課程学生の